

ヴィルディユ夫人の小説に見る17世紀フランス演劇

——「見知らぬ女」の誘惑——

秋山伸子

I. 新しい恋のお相手は妻

ヴィルディユ夫人の小説『恋の暦』（1670年）のなかにこんな話がある。マリアンヌはノガレと恋愛結婚をしたのだが、結婚してから3、4ヶ月もすると、お互い妻と夫であることに耐えられなくなってしまった。ある晩、マリアンヌは仕立屋から届いたばかりのドレスを着て、目の部分だけを覆う仮面をつけて外出する。その姿で王宮の庭で一人もの思いにふけていると、夫ノガレがやって来る。夫は目の前にいるのが妻とも知らずにこの魅力的な女性を口説き始める。夫をからかってやろうと思ってマリアンヌは声色を変えて受け答えをする。ノガレはこの見知らぬ女性にすっかり心を奪われてしまう。マリアンヌのほうでもこの恋愛ゲームを面白く思い、仮面をつけたまま、逢い引きを重ねる。恋文の交換をするにも代筆を頼むという念の入れようだ。ところで、仮面をつけているというだけで自分の妻も見分けられない、あまつさえその女性に恋をしてしまうという同じテーマはすでに舞台にかけられていた。ドリモンの手になる『新しい恋のお相手は妻』（1661年）のことだ。この二つの作品が描いているのは、相手の顔（の一部）が仮面で隠されていることで余計に恋心をくすぐられるという恋愛心理の不思議である。『新しい恋のお相手は妻』ではレアンドルは仮面をつけた女性を一目見るや魅了される。

Léandre : [...]

Masque, ce sein est beau, que ces yeux ont d'attraits,

Je ne puis déjà plus en soutenir les traits,

Sous cet habit d'esclave ici tu viens paraître;

Mais esclave charmant, tu n'auras point de maître.

Cet habit me serait bien plus propre qu'à toi;

[...]

(*L'Amant de sa femme*¹⁾, scène 6)

レアンドル「[……] 仮面の女、おまえの胸は何と美しく、目は何と魅力的なのだろう。

もうこれ以上おまえの魅力には逆らえない。おまえの衣装は奴隷のものだが、何と魅力的な奴隷がいたものだろう。おまえを自由にすることのできる主人などどこにもいない。その衣装は私にこそふさわしい。[……]

(『新しい恋のお相手は妻』第6景)

「この魅力的な女性は仮面をつけているにもかかわらず (Quoique masquée), あまりに美しすぎる」とレアンドルは説明しているのだが、事実はこの説明とは全く逆なのである。つまり、この女性は仮面をしているがゆえにますます魅力的に見えるのである。仮面によって顔のほかの部分が覆われているからこそ、その女性の瞳の輝きが増すのであるし、ちらりと目に入った部分の美しさがその女性の完璧なまでの美に対する期待をふくらませ、男心をくすぐるのである。見ることを許される部分が小さければ小さいほど、隠されている部分の魅力についての期待が高められ、恋愛の原動力となる。このことはたとえば次のレアンドルの台詞に鮮明に表われている。

Léandre : Je vous crois un miracle, un chef-d'œuvre des Cieux.

Et toutes vos beautés s'expliquent par vos yeux;

Ce bel air, ce beau bras, cette gorge admirable,

Montrent qu'il faut qu'en tout vous soyez toute aimable.

(*ibid.*)

レアンドル「あなたの美しさはこの世のものではない。神々の贈り物なのだ。あなたの瞳を見れば、あなたがどんなに美しい女性かということがわかるのです。香り立つ気品、美しい腕、優美な喉のライン、どれもあなたのたぐいまれな美しさを保証するものです。」

ノガレの見せる反応もこれによく似ている。

[...] il [Nogaret] admirait tantôt ma taille, tantôt la forme de ma gorge, mes cheveux étaient les plus beaux qu'il eût jamais vus, mes yeux, mon action, ce qu'il remarquait du bas de mon visage, tout l'enchantait. [...] pour le trancher court, il sortit de ce jardin le plus amoureux de tous les hommes.

(*Les Annales galantes*²⁾, p.248)

ノガレは私の立ち姿を褒めるかと思えば、「喉の線の美しさときたらどうです」などと言ったりするのです。これほど美しい髪は見たこともないし、私の目も身のこなしも、要するに仮面で隠されている部分以外で目に入るものすべてが彼の心を虜にしたのです。[……] はしよって言えば、ノガレはすっかり新しい恋にのぼせあがって庭から立ち去ったのです。

(『恋の暦』)

『新しい恋のお相手は妻』では、自分の妻に言い寄っているとも知らないでレアンドルはさまざまな勘違いを引き起こし、クリメヌのほうでは自分に夢中になっている夫の姿をひとしきり楽しむ。仮面をつけた女性への情熱は言い換えるなら、隠されている素顔を暴きたいという欲望に他ならない。その願望が果たされてもなお「男の人は恋愛の情熱を持っていられるのでしょうか」、こんな問いをクレヴの奥方なら投げかけるかもしれない。クリメヌはレアンドルにこう問いかける。

Climène : Puisque ce masque enfin a fait votre amoureux tourment,
Mon visage sans lui ne serait plus charmant,
Je crains en le posant de n'être plus aimable,
Et de vous voir troublé, confus, surpris, coupable.

(*L'Amant de sa femme*³⁾, scène 15)

クリメヌ「だって結局はこの仮面がお気に召したのですから、この仮面をはずしてしまえば、あなたの想いも冷めてしまうのではありませんか。仮面をはずしたら、あなたは私のことなど愛してはくださらないのでは。それに、あなただって困ってしまうのでは。あなたが不意をつかれ、取り乱し、後悔なさるのではないかと心配なのです。」

(『新しい恋のお相手は妻』第15景)

仮面をつけた女が自分の妻であったということが明らかになった後でレアンドルは次のような正当化を試みる。

Léandre : Tout ceci, sur ma foi,
M'engage pour jamais à redoubler ma foi;
C'était votre ascendant, et notre sympathie,
Qui m'a fait par deux fois vous consacrer ma vie;
Cet amour doit produire un bon effet en nous,
Puisque je n'ai jamais pu rien aimer que vous;
Je suis né pour aimer l'adorable Climène,
Et l'aimerai toujours quelque habit qu'elle prenne.

(*L'Amant de sa femme*, scène 18)

レアンドル「すべては夫婦としての私たちの絆を強めるものでしかありません。そもそもあなたの魅力に惹き付けられたからこそ、それにお互いがお互いを呼び合う気持ち

あったからこそ、あなたに永遠の愛を二度も誓うはめになったのです。結局はこういう恋をしてよかったのです。なんといっても私が愛したのはあなただけなのですから。私は美しいクリメヌを愛するために生まれてきたのですし、クリメヌがどんな衣装を身にまどっていようが私の愛は生涯変わることはないでしょう。」

(『新しい恋のお相手は妻』 第18景)

つまり、仮面をつけた見知らぬ女性への恋は「浮気」ではなかった。その女性は結局のところ自分の妻に他ならなかったのであるから。この「恋」はそもそも「お互いを引き寄せる引力のようになにか神秘的で不思議な力」のせいで引き起こされたのであろうし、もともとの夫婦愛をかえって強める結果になったのだということで、喜劇はめでたしめでたしの結末を迎えるわけである。ドリモンのこの戯曲を意識してかどうかはわからないが、ヴィルディユ夫人が『恋の暦』の挿話に与えた結末はより現実的なものである。マリアンヌの夫ノガレは、「見知らぬ女」と田舎の一軒屋で逢い引きし、その女が寝ているベッドに潜り込むのだが、その「見知らぬ女」が自分の妻だということがわかるとすっかり腹を立ててしまったのである。

Mais quand après ces premiers moments de trouble et de transport, il vint à tirer entièrement mon rideau, et que dans cette inconnue si tendrement aimée, il vit cette même femme qui lui était si indifférente : O Dieux! s'écria-t-il, ce n'est que ma femme; [...]

(*Les Annales galantes*, p.263-264)

ですが、ノガレは最初の何分か [やっと思知らぬ女の素顔を見ることができると思って] 気がはやって仕方がないというふうでしたが、やがてベッドのそばへやって来て、カーテンを開きました。するとどうでしょう。そこにいるのはあんなにも恋焦がれていた見知らぬ女性ではなく、もう何の関心も無くなってしまった女ではありませんか。「何ということだ。マリアンヌだったのか」とノガレは大声を上げたのでした。

(『恋の暦』)

ところで、この挿話の語り手は他ならぬマリアンヌなのであり、マリアンヌはノガレと離婚しようと思って、自由に夫や妻を取り替えることのできる国ロンバルディアにやってきて、離婚をしたいと思うに至ったいきさつをロンバルディアの王妃に語っている。ところが、この話を語り終えるや、マリアンヌはノガレと離婚したいと思っていた気持ちを失ってしまう。

Mais, Madame, admirez la bizarrerie de mon étoile, la liberté où je suis de me séparer de Nogaret, me fait trouver cette séparation insupportable. [...] Comme je l'[mon mari] ai imité dans son dégoût, peut-être suivra-t-il mon exemple dans mon retour. La

nécessité de nous aimer a fait naître notre antipathie, la liberté de nous haïr, doit rallumer notre passion.

(*Les Annales galantes*, p.266)

「王妃さまお許してください。何と奇妙なことでしょう。いつでもノガレと別れられると思うと、今度は何としても別れたくないような気がしてきたのです。[……] 夫が私に飽きたので、私も夫に愛想づかしをしたのですから、こんどは私の気が変わったのに合わせて夫の気も変わることでしょう。愛し合わなければと思うあまりにお互い嫌になってしまったわけですが、自由にいがみあってよいとなると、失くしてしまったはずの気持ちも蘇ってきたようなのです。」

(『恋の暦』)

マリアンヌのこの考えは的中し、マリアンヌとノガレの愛は再燃し、ふたり仲良くフランスへ帰ることになる。そればかりではない。同じように離婚の自由を求めてやって来ていたフランス人のカップルが何組も、マリアンヌ・ノガレ夫妻と同様の行動をとったのである。

Cet époux et cette épouse se repirent avec autant d'amour qu'ils s'étaient pris la première fois, et leur exemple ayant été suivi de beaucoup d'autres, ils ramenèrent en France plusieurs maris et plusieurs femmes, qui renoncèrent au privilège de divorce, et qui publièrent que le désir de changer cesse entièrement, sitôt qu'il est permis de le faire.

(*Les Annales galantes*, p.267)

ノガレもマリアンヌももとのような愛情が蘇ってきたのを感じた。ふたりの例は他のカップルにも伝染した。何組ものフランス人のカップルが、せっかくの離婚の特権を放棄したのみならず、いざ自由にパートナーを変えてよいとなると、そんな気もすっかり失せてしまったと言ったのである。

(『恋の暦』)

ともすれば深刻になってしまう危険のあるテーマに一定の距離をおいて笑い飛ばしてしまうところがヴィルディユ夫人の面目躍如といったところか。ここには恋愛のはかなさを描きながらも、悩み苦しむ登場人物をユーモアの混じったまなざしで暖かく見守るヴィルディユ夫人の姿勢が感じられるのである。

ところで、『新しい恋のお相手は妻』に現われたようなテーマの裾野は意外に広く、相手の女性の魅力の一部しか知らされないうえに（それゆえ）恋に落ちる男性の姿や愛する女性は自分のすぐ傍にいるのにみせかけに欺かれてそれと気付かない男性の姿を題材にした戯曲が、1640年～1660

年代のフランス演劇のひとつの流行となっていた。そのことはこの時期の戯曲のタイトルを眺めるだけでもわかる。1647年にはドゥヴィルが『誰だか知らずに恋に落ちて』を発表すると、1650年にはボワロベールが『恋敵は自分』を発表。同じボワロベールの手になる『見知らぬ女』が1655年に、『見えない美女』が1656年に舞台にかけられると、1658年にはトマ・コルネイユが『歌声に魅せられて』を発表。1661年にはドリモンの『新しい恋のお相手は妻』が続くといった具合だ。いずれも愛する女性が誰なのかを知ろうとする男性の行動が戯曲全体の牽引力として働き、戯曲の演劇的緊張感を生み出しているという点が共通している。だから当然のことながら、女性の正体が明らかになれば戯曲は終結することになる。これがヴィルディユ夫人の小説と決定的に違うところと言えよう。むしろ夫人はこの特性を逆に利用して当時流行の戯曲の主題を自分の小説世界に巧みに取り込むことに成功したと言えるのではないか。ここで我々にとって意味を持つのは、ヴィルディユ夫人の小説を通して当時の演劇事情が見えてくるという点である。「見知らぬ女」に魅了された男たちが当時の戯曲にどのように描かれているか見ていくことにしよう。

II. 「見知らぬ女」の誘惑

1. 「仮面」のエロティシズム

「仮面」には二つの相矛盾する機能があることが知られている。「仮面」は「隠す」(dissimulation)と同時に「見せる」(ostentation) ための道具なのだ。仮面によって顔の一部が隠されていることは恋愛の発生を妨げる性質のものではない。逆説的なことだが、仮面によって隠蔽されているからこそ恋心がそそられるのである。ドン・カルロスは恋の始まりをドン・ペドロに語る。

Dom Carlos : [...]

J'aimais sans connaissance une invisible amante,

Et l'aimais toutefois d'une ardeur véhémence.

Les visibles objets m'étaient moins précieux.

[...]

(*La Belle invisible*⁴), I,1)

ドン・カルロス「[……] その女の顔も知らないのに、その女のことが忘れられない。恋の炎にこの身が焼き尽くされてしまいそうなのだ。あの女の魅力に比べたら、どんな美人も色褪せて見える。[……]」

(『見えない美女』第1幕第1景)

ドン・カルロスは「その女性の魅力は確かに隠されています。ですが抗いがたいのです。(“Ses charmes sont plus forts quoiqu'ils soient plus cachés”）」、第3幕第9景)と自己分析しているが、

事情は全く逆なのであって、その女の魅力が隠されているがゆえに、惹き付けられるのである。そのことは次のドン・ペドロの台詞からも明らかであろう。

Dom Père : [...]

Quelle bizarrerie, et quelle nouveauté
De vous voir mépriser la visible beauté,
Pour ne vous attacher qu'à l'objet invisible?
Il faut donc se cacher pour vous rendre sensible!
[...]

(*La Belle invisible*, V,1)

ドン・ペドロ「[……] こんな話は聞いたこともない。誰もが美人だと褒めそやしている女性を袖にして、美人かどうかもわからない女性にご執着とは。君の心を射止めるには姿を隠さないといけないようだね。[……]」

(『見えない美女』第5幕第1景)

ベールが仮面の代わりになる場合もある。ボワロベールの『見知らぬ女』ではドン・フェリックスがクリメヌに恋するのだが、女がベールを少し上げて垣間見せた瞳の美しさゆえに恋に落ちるのである。

Dom Félix : [...]

Découvrant un bel œil pour me voir au visage,
Allez, vous en saurez quelque jour davantage,
Dit-elle [...]
Ce bel œil me perça, je la voulus connaître;
Mais dans le petit bois je l'ai vu disparaître.

(*L'Inconnue*⁵), I,4)

ドン・フェリックス「[……] 私の顔をよく見ようとして、その女性の美しい瞳が片方だけちらりと覗いた。「さあもう行ってください。そのうち、素顔をお見せしましょう。」とその女性は言った。[……] 彼女のあまりに美しい瞳が私を虜にしたのです。その女性が誰なのか知りたい。そう思いました。ですが、その女性は木立のなかに姿を消してしまったのです。」

(『見知らぬ女』第1幕第4景)

女が顔を隠していることはその女の美貌を保証するものだ。恋する男はそう解釈する。

Dom Carlos : Ce mystère caché redouble mon envie.
Celle qui dans ce lieu m'a de nuit appelé,
Et d'une grille basse obligeamment parlé,
Sans doute est jeune et belle, ailleurs je l'ai connue,
Quoiqu'elle ait dérobé son visage à ma vue;
[...]

(*La Belle invisible*, I,1)

ドン・カルロス「こんなふうに謎めいていればいるほど、知りたいという気持ちが強くなるのだ。ここで、あの夜私を呼び止め、地下室の鉄格子ごしに声をかけてくれたあの女性はきっと若く美しいに違いないし、どこか別の場所で会ったことのある女性なのだろう。もっとも、素顔を見ることはできなかったが。[……]」

(『見えない美女』第1幕第1景)

ドン・カルロスは仮面をつけた女性への恋の始まりを次のように語っている。

Dom Carlos : [...]
Je sentis d'un carrosse assez embarrassé
Qu'une voix m'appelait, je m'avançai vers elle,
Une dame en portière, et qui paraissait belle,
Quoiqu'elle fût masquée, avec un ton de voix,
Me dit, [...]

ドン・カルロス「[……] 行く手を遮られて立ち往生している馬車があった。馬車の中から声をかけられたような気がして、その声のほうへ進み出ると、ドア近くに座っていたひどく美しい女性が、と言っても、仮面をつけていたのだが、何とも言えない声で私にこう話しかけたのだ。[……]」

その女性と少し言葉を交したと思うとその女性を乗せた馬車は稲妻のように走り去ってしまった。

Dom Carlos : [...]
Vite comme un éclair le carrosse passa,
Et suivant avec l'œil la belle disparue,

Je demeurai confus au milieu de la rue.
Je vous jure, Dom Pèdre, avec sincérité,
Que l'amour jusques-là ne m'avait rien été;
J'éprouvai de ce jour son pouvoir manifeste :
[...]
J'aimais sans connaissance une invisible amante,
Et l'aimais toutefois d'une ardeur véhémence.
Les visibles objets m'étaient moins précieux.
[...]

ドン・カルロス「[……] 稲妻のようにあっという間に、馬車は走り去ってしまった。消え去った女を目で追いながら私は通りの真ん中に呆然と立ち尽くした。ドン・ペドロ、誓って言うが、それまで、私は愛だの恋だのにまったく興味が持てなかった。ところが、その日以来、自分でもどうすることもできないのだ。[……] その女の顔も知らないのに、その女のことが忘れられない。恋の炎にこの身が焼き尽くされてしまいそうなのだ。あの女の魅力に比べたら、どんな美人も色褪せて見える。[……]」

ところが、後日その女性に再びめぐりあう。その女性の瞳の輝きは、間違いない、あの時の女性 (mon aimable inconnue) のものだ。

Dom Carlos : [...]
Je crus voir ce même œil qui me charme et me tue,
Au travers de son voile, et ce brusque penser
Me fit vite vers elle aussitôt avancer.
[...]

(*La Belle invisible*, I,1)

ドン・カルロス「[……] 私を虜にしたあの瞳に間違いない。あの女性の瞳がペールの下に垣間見えた気がした。その思いにつき動かされるようにして、その女性のほうに歩み寄ったのです。[……]」

(『見えない美女』第1幕第1景)

このテーマで不思議な点のひとつは、仮面をつけた女性に魅了される男性のうち誰一人としてその女性がもしかして醜いかもしれないという可能性に思い当たらない点だ。この仮説が現われ

ることはあっても、それは恋する男性への忠告という形でしかないし、そんな忠告は一笑に付される。

Léandre : Enfin je suis charmé d'une beauté divine.

Scapin : Enfin je suis charmé d'un masque à laide mine,
Parbleu l'on est de vous dans un moment vainqueur,
Je n'ai qu'à me masquer pour gagner votre cœur.

Léandre : Ne fais pas tant le sot.

(*L'Amant de sa femme*, scène 8)

レアンドル「僕はその女性のこの世のものとは思えぬほどの美しさにすっかりまいてしまったのだ。」

スカパン「醜い顔を隠す仮面の威力はたいしたもんです。若旦那をだますのはお茶の子さいさいですな。仮面をつけさえすれば、あっしにだって一目惚れなさいましょう。」

レアンドル「ばかを言え。」

(『新しい恋のお相手は妻』第8景)

仮面をつけた姿で男性を誘惑した当の女性がその男性の前に素顔で現われ、仮面をつけた女性は醜い顔を仮面で隠しているのかもしれないと示唆する場合もある。

Olympe : [...]

Carlos, cette inconnue a des défauts cachés,
Puisqu'un voile la suit lors que vous l'approchez.

[...]

オランプ「[……] カルロス、その女にはなにか人に知られたくないような傷でもあるのだとは思いませんか。だってあなたに近付くときはいつもベールを被っているなんてどう考えても変ではありませんか。[……]」

これに対してドン・カルロスは次のような反論をする。

Dom Carlos : [...]

Je suis cette chimère, et cette ombre à vos yeux.
Au travers de son voile elle a jeté sa flamme,
Dès qu'elle a découvert les beautés de son âme,
Comme un foudre d'abord son esprit m'a frappé,

Le visage y répond, ou je suis bien trompé :
Mais je serais pour elle, et constant, et sensible,
Quand je n'aurais connu que son charme invisible.

(*La Belle invisible*, IV,3)

ドン・カルロス 「[……] あなたにはまぼろし、まやかしにしか思えないでしょうが、たとえそうでも私はあの女性を追いかけます。あの女性がベール越しに投げたまざしが私の心に火をつけたのですから。あの女性の心がどんなに美しいかを知った今となっては。あの女性の心がまるで雷の一撃のように私の胸を打ったのですから。あの女性の顔だって心と同じくらい美しいはずなのです。いずれにしてもあの女性には誠実で変わらぬ愛を捧げるつもりです。たとえあの女性の素顔を見ることができなくても。」

(『見えない美女』第4幕第3景)

愛する女性の姿が完全なかたちで「見えない」ということは、その女性が美しいということと同義であるのみならず、その女性の完璧なまでの美を保証するものなのである。

Hortense : [...]

Comme je m'en allais éclaircir mon soupçon,
Et voir à découvert la beauté de Célie,
Le plus parfait objet qui soit en Italie,
Ces importunes sœurs par leur méchanceté,
M'ont ravi ce bonheur que j'ai tant souhaité.
[...]

(*Aimer sans savoir qui*⁶⁾, IV,4)

オルタンス 「[……] いよいよ僕の疑いが晴れるときが来た。セリの美しい素顔を何にも邪魔されないで見ることができるのだ。イタリアで一番美しいセリの素顔が見られるのだ、そう思ったまさにそのとき、[彼女の見張り役の] 修道女たちがやってきて、あろうことか僕の願いをふいにしたのだ。[……]」

(『誰だか知らずに恋に落ちて』第4幕第4景)

相手の女性が仮面で素顔を覆い隠しているにもかかわらず、レアンドルはその女性が「この世のものとも思えないほどの美しさ」(“dans toute la ville, / Rien ne doit égaler vos célestes beautés”, *La Jalouse d'elle-même*⁷⁾, 『恋敵は自分』I,4) をもっていると確信するのである。

ブラインドが仮面の代わりになる場合もある。ドゥヴィルの『誰だか知らずに恋に落ちて』では、オルタンスはある時通りから見上げた窓に姿を現わした女性のことを好きになるのだが、ブラインドに邪魔されてその女性の姿を思う存分見られないことで恋する気持ちが一気に高まるのである。

Hortense : [...]

Comme je l'allais voir chez lui, j'ai vu paraître
Une jeune beauté souvent à la fenêtre
Quoique je n'ai jamais encor eu le plaisir
De pouvoir sur ce point contenter mon désir,
Ni la voir à mon aise, ouvrant sa jalousie,
Seulement à demi, [...]

(*Aimer sans savoir qui*, I,2)

オルタンス「[……] ペリアンドルの家へ向かっていると途中でよく若くて美しい女性が窓辺にたたずんでいるのが目に入った。ところでこの点についてはまだ思い通りには行っていないし、その女性を思う存分眺めたというわけでもないのだが。というのも彼女、ブラインドを途中までしか開けないものだから [……]」

(『誰だか知らずに恋に落ちて』第1幕第2景)

オルタンスは一度として愛するセリの姿を満身に眺められたためしがないことを友人であるペリアンドルにしきりに嘆いてみせる。セリの部屋に案内されたこともあるのだが、それは真夜中のことで、あたりが暗くて相手の顔も見えない(第1幕第2景)。

Hortense : [...]

Quoique lors je n'eus pas le moyen de la voir,
Comme j'eusse voulu, je connus, ce me semble,
Quelque air de Périandre, et qu'elle lui ressemble,
Je lui donnai une bague, et lui touchant la main,
J'attestai de là-haut le pouvoir souverain,
De la tenir pour femme, et demeurer fidèle,
La nourrice aussitôt emportant la chandelle,
Nous laissa dans le lit jusques au point du jour.

(*Aimer sans savoir qui*, I,2)

オルタンス「[……] そのとき彼女の姿を見る術もなかった。僕の期待は裏切られたわけだ。それでもとにかく彼女はペリアンドルになんとか雰囲気がよく似ていた。ペリアンドルにそっくりだった。彼女に指輪を与え、手を取り、天にましますわれらが神に、彼女を妻とし、貞節を守ることを誓ったのだ。すると彼女の乳母がすぐにやって来て、明りを持って行ってしまった。それから夜がまだすっかり明けてしまわないうちに僕たちふたりは別れたのだ。」

(『誰だか知らずに恋に落ちて』第1幕第2景)

オルタンスの腹心のヴァレールはオルタンスが「素性の知れない女」と結婚したという事実を聞かされて驚く

Valère : Vous m'étonnez, Monsieur, de voir que votre amour
Vous ait fait épouser une femme inconnue.

(*ibid.*)

ヴァレール「何てことです。まるで知らない女と結婚したのですか。」

のだが、事実は逆なのであって、むしろこう言ったほうが正確ではなからうか。オルタンスがセリと結婚したのは、相手が「見知らぬ女」であったがゆえではないのか。結婚することで、「見知らぬ女」を見ることができると期待こそがオルタンスの恋心のすべてではないのか。オルタンスの次の台詞にいみじくも言い表わされているように

Hortense : [...]

J'ai vu quatre ou cinq fois cette beauté que j'aime,
Depuis près de trois mois, de la même façon,
Mais avec tant de crainte, et de précaution,
Que je n'ai pu la voir encor bien à mon aise.

[...]

(*ibid.*)

オルタンス「[……] 僕はこの女性に何度か会っているけど、この三ヶ月ほどの間状況は少しも変わっていない。彼女はいつも用心に用心を重ねているものだから、一度だってまじまじと見つめることができたためしがないんだ。[……]」

恋する相手を心ゆくまで眺めたいという願望を徹底して妨げられ続けることで、恋愛の情熱が一層高められるのである。

Hortense : [...]

Mais ce qui plus m'afflige est que je ne saurais

Lui parler, ni la voir à mon aise une fois :

[...]

(*Aimer sans savoir qui*, IV,2)

オルタンス「[……]でも、何よりつらいのは、一度だって彼女を好きなだけ眺め、思う存分話しをすることもできないということなんだ。[……]」

(『誰だか知らずに恋に落ちて』第4幕第2景)

とオルタンスは嘆いて見せるのだが、果たしてセリを思う存分一度でも眺め、心ゆくまで話しをすることができていたら、オルタンスはここまでセリに夢中になったろうか。むしろヴィルディユ夫人が『愛の無秩序』のなかに描いたような悲劇的な結末を迎えたのではなかろうか。

2-1 愛のフェティシズム

愛する女性を思う存分眺めることが許されないことで、男性の側の欲望は高まる。ベールを通してちらりと見える素顔、仮面の下に覗く魅惑的な目線、それらは断片的であるがゆえに、より一層官能的で刺激的なのである。女性の身体の部分的な魅力に惹き付けられる男性の姿は、「見知らぬ女への愛」をテーマとしたこの時代の戯曲に共通して見られる特徴であるといえよう。仮面で素顔を隠した女性の美しさは断片的に視線に曝されている部分によって推し測られる。ボワロバールの『恋敵は自分』では恋するレアンドルの心を魅了したのはその女性の美しい手であった。

Léandre : Dieux! que viens-je de voir, quelle main admirable,

Ah! c'est la main d'un ange, elle est incomparable :

Qu'ai-je vu, Filipin, qu'ai-je vu, justes Dieux?

レアンドル「おお何という美しい手。あれこそ天使の手だ。あんな美しい手が他にあるだろうか。フィリパン、何という美しい手だろう。」

美しい手に心を奪われその女性の顔を確認しようと視線を上げると、目に入ったのは仮面をつけた女の姿であった。

Léandre :

Une main qui m'a charmé les yeux;

C'est une main de lys; ce sont des doigts de rose,
Et mon œil ébloui n'a pu voir autre chose;
La belle était masquée.

(*La Jalouse d'elle-même*, I,3)

レアンドル「あの手が僕の目を射たのだ。百合と見まがうばかりの手。薔薇の花びらのような指。目がすっかり眩んでしまって、僕にはもう他には何も目に入らなかった。その女性は仮面をつけていたのだ。」

(『恋敵は自分』 第1幕第3景)

その女性の財布のなかにしまわれていた指輪を手に取りいとおしげに愛撫するレアンドルの姿にはフェティシズムの香りが漂う。

Léandre : Un dez, deux bagues d'or, et deux d'émail encore,
Il faut que je les baise, et que je les adore;
Puisqu'elles ont touché des doigts plus précieux,
Que ceux par qui l'Aurore émaille tous les Cieux;
Doigts d'une main divine où mon feu prend sa source.

(*La Jalouse d'elle-même*, I,5)

レアンドル「さいころがひとつ。金の指輪がふたつ。七宝の指輪がふたつ。さあ僕の口づけを受けなさい。可愛がってあげよう。彼女の指に触れた指輪なのだから。彼女の指は天空に曙がちりばめる薔薇色よりもずっと素敵なのだから。この世のものとも思えないあの手には僕は恋したのだから。」

(『恋敵は自分』 第1幕第5景)

2-2 歌声に魅せられて ——視覚を奪われたがゆえの官能——

視覚の満足を得られない代償としてオルタンスは聴覚の満足を与えられる。セリの歌を聴いてうっとりとしているオルタンスの姿からは、視覚的な欲求が満たされないがためにかえって聴覚という官能の喜びが高まる様子が窺われる。

Hortense : Quels charmes! quels transports! où suis-je, justes Dieux?
Suis-je à présent en terre ou ravi dans les Cieux?
Quelle divine voix qui n'a point de pareille,
Me dérobe en ce point mon âme par l'oreille?

[...]

Je voudrais vous prier, Madame, qu'il vous plaise,
Ne vous ayant point vue encor bien à mon aise,
Si j'ai sur votre esprit quelque peu de pouvoir,
De hausser votre coiffe, et de vous faire voir.

(*Aimer sans savoir qui*, IV,3)

オルタンス「何という魅力。魂が揺さぶられる。どこに連れて行かれたのだ。ここは地上なのだろうか。それとも天上の世界だろうか。こんな妙なる歌声を今まで耳にしたことがない。耳から魂が吸い取られてしまいそうだ。[……] お願いします。あなたの姿をまだ思う存分見たことはありません。あなたが私のことを少しでも大切に思ってください。気持ちがおありなら、ベールを上げて、素顔を見せてください。」

(『誰だか知らずに恋に落ちて』第4幕第3景)

この女性はオルタンスから距離的に隔てられている（オルタンスが見上げている屋敷の二階の窓越しに歌声を聴かせている）ばかりではない。ブラインドがさらに二人を隔て、その女性はベールで顔を覆っているという念の入れようである。隔てられれば隔てられるほど、隠されれば隠されるほど、その女性の素顔を見たいという恋する男の気持ちは高まる。これこそ恋愛を持続させる唯一の方策なのだ。だから男の愛を繋ぎ止めておきたければ、永遠にこの隠れんぼを続ける必要がある。実際、この戯曲では、オルタンスのこのささやかな望みはまたしてもおあずけをくらう。セリがベールを持ち上げて素顔を見せようとする、奥のほうからセリを呼ぶ声をする。

Périandre [Célie] : En l'ayant su plutôt j'en eusse été ravie,
Et j'eusse sur ce point contenté votre envie,
Madame, je m'en vais. Pardonnez-moi, Monsieur.
J'entends que l'on m'appelle.

(*Aimer sans savoir qui*, IV,3)

セリ「まあ、そんなことならもっと早く言ってくださればよろしかったのに。そんなことならおやすいご用ですわ。はい。今いきます。ごめんなさい。誰か奥で呼んでいるみたいですので。」

(『誰だか知らずに恋に落ちて』第4幕第3景)

ところが喜劇というジャンルの制約上、愛する女の素性が明らかになることで筋の展開は終結しないわけにいかない。喜劇というのは登場人物の幸せな結婚で終わる必要があるから、愛する女が誰だかわかったら、男はその女とめでたく結婚と相成るのだ。

もっと極端な例になると「愛する女性」の姿が全く見えないということもある。女性の声の美しさが男性を虜にするのである。視覚を奪われることでかえって残りの感覚が研ぎ澄まされ、こうして男性は官能的な恋愛へと誘われるのである。

Fénisse : [...]

Dans le palais du duc j'ai cet appartement,
Qu'ayant sur ce jardin une secrète vue,
C'est de là qu'aisément sans en être aperçue,
J'ai pu, quelque ordre exprès qui m'en ôtât l'espoir,
Et voir ce jeune prince et suivre mon devoir.
Hélas! par cette vue où me vois-je réduite?
Ma raison en désordre en fut d'abord séduite,
Et pour le dissiper je cherchai dans ma voix
Ce charme qu'à mes maux elle offrait autrefois,
Mais qu'indiscrettement je rompis le silence!
Le duc en est surpris, il s'approche, il s'avance,
Je me pers, je me trouble à le considérer,
Interdit et confus je l'entends soupirer,
Et l'un et l'autre atteints de blessures pareilles,
S'il m'éblouit les yeux je touche ses oreilles.

(*Le Charme de la voix*⁸⁾, I,1)

フェニス「[……] 私のこの部屋は公爵さまの宮殿のなかにあって、ここから庭をこっそり覗くことができる。ここなら誰に見つかる心配もなく、お父さまがいくら駄目だと言ったところで公爵さまの姿を眺めることもできるし、お父さまのいいつけに背く心配もない。だけど何ということでしょう。どうして公爵さまのお姿を見てしまったのかしら。私はすっかり平静な気持ちを失ってしまった。不安な気持ちを少しでもなだめようとして歌い始めたの。辛いときとかにいつもそうしていたようにね。でも歌ったりするなんて考えななかったわ。公爵さまは私の歌声に不意を打たれた様子で、こちらのほうへ近づいてきた。言葉を失い度を失った様子でため息をつくのが聞こえたわ。そう私たちふたりとも同じ傷を負ってしまったのよ。あの人が私の目を奪ったように、私の歌声があの人を心で虜にしてしまったの。」

(『歌声に魅せられて』第1幕第1景)

Ⅲ. 恋敵は自分 —— 「その女」は「私」 ——

恋する男は盲目である。自分が「恋している」女性のすぐ近くにいるのに、そのことに少しも気付いていない。これが、「見知らぬ女への恋」のテーマに内包されているモチーフのひとつである。たとえば『誰だか知らずに恋に落ちて』では、オルタンスは恋人セリの姿を夜の闇のなかで眺めたとき、友人のペリアンドルの面影を認めたように思い、「セリはペリアンドルに実によく似ている」（第1幕第2景）と思うのだが、なぜかそれ以上この考察を深めるといことはしない。親友のペリアンドルにセリがそっくりなのはふたりがいとこであることで説明がつくし、オルタンスはこのことをただ無邪気に喜ぶだけなのである。

Hortense : [...]

Pour si peu que j'ai vu de ma Célie, il semble,
Qu'elle a de son cousin quelque air qui lui ressemble,
Dont je suis très content, et si fort satisfait,
[...]

(*Aimer sans savoir qui*, IV,4)

オルタンス「[……] セリをちらっと見た印象からすると、どうやらセリはいとこのペリアンドル似らしい。このことについてはとても満足だし、言うことはない。[……]」（『誰だか知らずに恋に落ちて』第4幕第4景）

窓辺に姿を現わしたセリはペリアンドルの弁解は自分の言葉だと思って聞いてほしいとオルタンスに頼むわけだが、この台詞はオルタンスにとってはまったく意味をなさない。

Périandre [en femme à la fenêtre] : [...]

Qu'ils [les obstacles à notre mariage] sont encor plus grands qu'il
[Périandre] ne vous les figure,
Croyez ce qu'il vous dit, comme si je parlais.
[...]

(*Aimer sans savoir qui*, IV,3)

ペリアンドル [セリとして窓のそばに立って]「[……] 私たちの結婚を阻む障害はペリアンドルがあなたにお話ししたよりもずっと大きいのです。ペリアンドルの話しを聞くときには、私 [セリ] が口をきいているのだと思ってくださいな。[……]」

(『誰だか知らずに恋に落ちて』第4幕第3景)

セリが嘆いているように、「思い込み」というのは厄介なものだ。目の前にあるものの真実の姿を見ることを妨げるのだから。

Périandre [Célie] seul[e] : [...]

Dieux! voyez ce que peut l'imagination,
Et qu'il faut bien qu'elle ait une force infinie,
A toute heure du jour je lui tiens compagnie,
Et sur presque partout la trace de ses pas,
Et dit qu'il ne me voit, et ne me parle pas :
[...]

(*Aimer sans savoir qui*, IV,6)

ペリアンドル [セリ] 独白「[……] なんてこと。想像力というのは厄介なものですね。どうやら想像力には思いもよらないほどの力があるみたい。いつもおそばにいるのに、あの人の行くところにはどこへでもお供しているというのに、あの人ときたら、セリに会えない、セリと話しができないなんて言っているんだもの。[……]」

(『誰だか知らずに恋に落ちて』第4幕第6景)

セリの台詞にあるように、セリの肉体（オルタンスはペリアンドルとして認識している）は、オルタンスがペリアンドルと一緒にいるときには常にオルタンスのそばにあったのだ。

Périandre [Célie] : Il est vrai, je suis femme, et la femme d'Hortense,
Celle dont il croyait être absent en présence,
Qu'il appelait Célie, et dont il a joui
En qualité d'époux.

(*Aimer sans savoir qui*, V,8)

ペリアンドル [セリ] 「たしかに、私はオルタンスの妻です。オルタンスが自分のそばに私がないと思っていたとき実は私は彼のすぐそばにいたのです。私こそ彼がセリと呼んでいた女、オルタンスの妻です。」

(『誰だか知らずに恋に落ちて』第5幕第8景)

仮面をつけている女性への愛、声の魅力から始まる恋、こうしたテーマを扱ったこの時代の戯

曲では、不思議なことに、これらの女性が仮面をつけていないとき、もっと言えば、これらの女性が全身をくまなく恋する男性の視線に曝している場合には、これらの女性の魅力は全く感知されないのである。レアンドルは目の前にいる女性が「美しい手」で自分を虜にしたのと同じ女性であることに少しも気付かない。

Filipin *bas* : Ah! Monsieur, qu'elle est belle.

Léandre *bas* : Oui, mais cette beauté n'est que l'ombre de celle.

Filipin *bas* : Qui sous un vilain masque a caché ses appas.

フィリパン(小声で)「ああ何と美しい女性^{ひと}でしょう。」

レアンドル(小声で)「だがあの女性^{ひと}にくらべたらすっかり霞んでしまう。」

フィリパン(小声で)「ああ、仮面でせつかくの魅力を隠しているあの女性^{ひと}のことですか。」

Léandre : Je ne puis t'ôter de ma mémoire,

Blanche et divine main qui fait honte à l'ivoire.

(*La Jalouse d'elle-même*, II,3)

レアンドル「僕はおまえのことが忘れられない。象牙さえ驚かすほど白く神々しい手よ。」

(『恋敵は自分』第2幕第3景)

そして多くの場合、自分を魅了した女性本人に対して、自分はいかに「別の女」の魅力の虜になっているかを語り、だから残念ながらあなたの想いには応えることができませんなどと間抜けな台詞を吐くのである。むしろ観客はすべての事情を知っているので、この風変わりな恋人の盲目ぶりを楽しむことになる。

自分の身体の一部の魅力で虜にした男性の愛を手に入れるためには自分自身と戦わねばならないという誠に奇妙な状況が生まれる。まさに『恋敵は自分』ということになるのだが、こうした状況は、愛する女性の素顔を暴こうとする男性の試みが成功するのを遅らせることで筋の展開に変化をもたらし、戯曲の構成に一役買っているといえよう。たとえば、『恋敵は自分』ではレアンドルは美しい手の持ち主の謎の女性に恋をしたわけだが、この恋はその手の持ち主の他の魅力さえも退ける。レアンドルは親の決めたアンジェリックとの結婚のためにこの町にやってきたのだが、そこではじめて会った女性に恋したのだ。ところでこの女性はアンジェリックその人なのだが、アンジェリックは将来自分の夫となる人は美しい女性になら誰にでもなびくのではという疑いを抱いてしまう。そこで、レアンドルの誠実さを試すために仮面をつけた女性としてレアンドルに逢引きの約束をしたりするのだが、レアンドルはその女性の手の美しさに参っているの

で、アンジェリックを目の前にしても何の感情も抱けないのだと美しい手の女（アンジェリックに他ならない）に告白する。

Léandre : [...]

J'ai vu cette Angélique, elle est belle, elle est sage,
Elle est jeune, elle est riche, et toutefois je sens
En vous certains attraits plus forts et plus puissants.

(*La Jalouse d'elle-même*, III,2)

レアンドル「[……] たしかに僕はそのアンジェリックとやらに会いました。美しく聡明な女性です。若くて金持ちだし。でも僕はあなたにもっと強く惹き付けられるものを感じるんです。」

(『恋敵は自分』第3幕第2景)

自分こそその美しい手の女であることをレアンドルに知らせさえすればすべてまるく収まるのに、アンジェリックがぐずぐずしているうちに、レアンドルに恋した別の女性が仮面をつけて登場し、自分こそ美しい手の女だと名乗りをあげたりするので、混乱が生じる。結局はアンジェリックが「美しい手」をレアンドルに見せることで、混乱に終止符が打たれ、戯曲も終結する。

Angélique : Et pour dernière preuve, ô trop heureux vainqueur,
Reconnaissez la main qui vous a pris le cœur.

Léandre : Oui, je la reconnais, je la baise et l'admire,

[...]

(*La Jalouse d'elle-même*, V,4)

アンジェリック「動かぬ証拠をお見せしましょう。あなたには降参ですわ。あなたの心を奪ったこの手をどうぞとくにご覧なさい。」

レアンドル「ああこれこそまさしくあの手。僕のキスを受けておくれ。[……]」

(『恋敵は自分』第5幕第4景)

まさに、「美しい手」の持ち主は誰かをめぐって戯曲全体が展開しているわけである。

『歌声に魅せられて』では公爵はフェニスの「歌声」に恋するのであり、それ以外の魅力には全く関心を示さない。たとえそれが、その「歌声」の持ち主のものであっても。

Fénisse : [...]

Je crus que me montrant sans me faire connaître,
Si par l'ordre du Ciel sa flamme avait pu naître,
Le duc serait contraint de la faire éclater
Aussitôt à me voir qu'à entendre chanter.
[...]
Ayant adroitement pratiqué quelque dame,
La curiosité me servant de couleur
Je la suivis au bal, hélas! pour mon malheur.
Ce fut pour mon orgueil de quoi se satisfaire
D'y mériter le nom de la belle étrangère,
Chacun m'offrit des vœux, chacun me fit sa cour,
Et le duc seul me vit sans me parler d'amour.
[...]

(*Le Charme de la voix*, I,1)

フェニス「[……] 私の素性を明かすことはできなくても、この姿を公爵さまのお目にかけさえすれば、私たちの愛が神さまが決めたことなら、公爵さまだっけと何かお応えになるはず。だって、私の歌声を耳にただけで、あんなに心を動かされておいでになったのですもの、私の姿をご覧になればなおのこと。[……] 適当なご婦人を上手くまるめこんで、どうしても舞踏会の様子を覗きたいのなんて言って、その女性ひとの後に、舞踏会に出かけたはいいけど。でもいかなければよかった。私のプライドもすっかり傷ついてしまった。美しい外国の女性というのでみんながちやほやしてくれたのに、私を口説こうとしない男の方は一人もなかったのに、あの公爵さまだけが、私の魅力に無関心な様子だったのだから。[……]」

(『歌声に魅せられて』第1幕第1景)

公爵にとっては「歌声」こそが女性の魅力のすべてなのだ。フェニスが自分はフェニスではなく、その侍女のセリだと告げたとたん、公爵の態度が変わる。

le Duc : [...]

J'ai beau voir dans Célie éclater mille appas,
C'est en manquer pour moi que de ne chanter pas.

(*Le Charme de la voix*, II,2)

公爵「[……] セリがいかにきれいでも、私には関係ありません。歌声の美しくない女性などに興味はないのです。」

(『歌声に魅せられて』 第2幕第2景)

フェニスのほうでは、自分の美貌に公爵が全く無関心なのがしゃくにさわってならないのだが、そんなこととも知らぬ公爵は、目の前にいる女性があの魅力的な歌声の主だとは夢にも思わないで、自分の恋心をフェニスに伝えてくれるようにと、セリ（フェニス）に頼む。その際、次のような台詞を口にする。

le Duc : Mais cette belle voix dont les divins accents

M'ont enchanté l'oreille et captivé les sens,

C'est là des plus grands cœurs le charme inévitable,

C'est par elle qu'au mien Fénisse est adorable,

Et que j'estime autant cet objet inconnu

Que je sens des mépris pour tout ce que j'ai vu.

(*Le Charme de la voix*, II,2)

公爵「でもこの美しい歌声の妙なる調子が私の耳を捕え、感覚のすべてを虜にしたのです。この歌声の魅力には抗うことができません。この歌声ゆえに、フェニスに恋をしたのです。その人の姿をいまだ見たことはありませんが、今まで会ったどんな美人よりも愛しいのです。」

(『歌声に魅せられて』 第2幕第2景)

IV. むすびに代えて

「妻が恋人」というテーマはヴィルディユ夫人の小説『恋の暦』のなかの一挿話に現われるだけである。だが、このテーマは実は当時の演劇界で一つの流行となっていた「見知らぬ女の魅力」というテーマの変奏であった。ヴィルディユ夫人の小説を彩る挿話の一つから当時の演劇の潮流を辿り直すことができるのである。そうした視点からヴィルディユ夫人の小説を読み直すことの意義は決して小さくはない。

注

- 1) Bibliothèque de l'Arsenal Rf 6046
- 2) Madame de Villedieu, *Œuvres complètes*, 1720, réimpression, Genève, Slatkine Reprints, 1971, volume III, tome 9
- 3) 『恋の暦』では仮面をつけたマリアンヌは手紙のなかでノガレにこう言って警告する。

[...] mais je doute qu'on puisse aimer ce qu'on n'a jamais vu. [...] mais que savez-vous, si ce que mon masque vous a caché, ne vous dégoûterait point de ce qu'il vous a laissé voir? Les femmes sont de grandes trompeuses, et peut-être au moment que vous m'aimez avec tant d'ardeur sans me connaître, je vous serais la personne du monde la plus indifférente si vous me connaissiez bien. (*Les Annales galantes*, p.255-256)

[……] でも顔を見たことのない女を愛したりできるものかしら。[……] それに仮面の下に隠されていたものをご覧になってもうんざりなさったりしないかしら。私の素顔を知らないで私のことを愛していると信じていらっしゃるようだけど、私が誰だかわかってみたら、もしかして、私はあなたにとってどうでもいい存在であるかもしれないのですよ。女というのはずるい生き物ですからね。

- 4) Bibliothèque Nationale 8 Yf 1166
- 5) Bibliothèque de l'Arsenal Rf 5543
- 6) Bibliothèque de l'Arsenal Rf 6615
- 7) Bibliothèque de l'Arsenal Rf 5530
- 8) Bibliothèque de l'Arsenal Rf 2679